

早稲田大学と慶應義塾大学の図書館システム共同運用について

1 はじめに

早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンター（図書館）は、図書館システムを共同で運用することを決定し、そのプラットフォームとなる図書館システムとしてEx Libris社のAlmaおよびPrimo VEを選定した。2019年度中の稼働を目指しており、稼働の際には、学生・教職員にとっては、両校の蔵書を合わせた1,000万冊規模の図書館が実現することとなる。また、紙媒体、早稲田が契約する電子媒体、さらには無料でアクセスできる電子媒体まで、一元的な資料の発見が可能となる。図書館にとっても、コスト削減、業務改善、資料の一元管理が可能となり、安定的かつ国際標準に準拠した学術情報を提供することが可能となる。

2 「早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターのシステム共同利用による連携強化に関する覚書」の締結

早稲田大学と慶應義塾大学は、1986年4月1日より「早稲田大学および慶應義塾の図書館相互利用に関する協定書」を締結し、お互いの大学に所属する学生、教職員の相互利用に便宜を図ってきた。2017年度現在での相互利用の範囲は、お互いの図書館の入館利用と個人貸出^{*1}、およびILLサービスである^{*2}。

早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンター（図書館）は、この協定書の枠組みを拡大させる形で、2017年5月12日に「早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターのシステム共同利用による連携強化に関する覚書」を締結し、以下の目的を掲げた。

- (1) システム共同運用による運用の安定化とコスト削減
- (2) 目録形式の標準化、目録作成のコスト削減
- (3) 早慶間での知識・経験の共有、人的交流の促進
- (4) 共同運用による利用者サービス・資料の充実

この覚書によって、両大学図書館が図書館システムを共同で選定し、利用するという前提が確立されることとなった。

3 新図書館システムの選定

覚書締結を受け、早稲田大学図書館と慶應義塾大学図書館は共同運用する図書館システムの要件をまとめた「提案依頼書」(RFP: Request For Proposal)を、2017年5月から7月の間に作成した。このRFPは、覚書に掲げた4点の目的を明記し、早慶がコンソーシアムで利用できる統合図書館業務基盤であること、クラウド環境またはSaaS環境で利用できること等々を前提としたうえで、



調印後、協定書を手にする早稲田大学図書館長 深澤良彰(左)と慶應義塾大学メディアセンター所長 赤木完爾(右)

現在の図書館業務と、将来想定される図書館業務の要件を抽出し、それぞれの実現性や可否について回答を求めたものである。

両大学図書館は、国内外の図書館システムベンダー8社にこのRFPを送付し、8月中旬に提案書を提出することを求めた。その結果、6社が辞退し、Ex Libris社を含む2社が提案書を提出した。両大学図書館は、10月にこの2社からプレゼンテーションを受けた上で、RFPの項目ごとに回答を採点し、11月までに2社の採点結果をまとめた。この採点結果を基準に議論を重ねた結果、Ex Libris社の提案を採用することを決定した。その後、両大学での正式な承認を経て、Ex Libris社のAlmaおよびPrimo VEを契約することとなった(早稲田大学での承認は、2018年2月16日 理事会:決定事項)。



(左)深澤館長、(中)Ex Libris社副社長 Ziv Benzvi氏、(右)赤木所長

4 新図書館システムの概要

選定された新図書館システムは、図書館業務システムがAlma、利用者向けのインターフェースがPrimo VEである。Alma、Primo VE共にEx Libris社が提供するクラウドベースの図書館システムで、図書館業務はすべてWebブラウザ経由で行われることとなる。なお、Ex Libris社は世界最大級の学術情報データベース提供会社であるProQuest社の図書館システム部門のグループ企業で、本社所在地はイスラエルである。

Ex Libris社の製品は、ケンブリッジ大学やハーバード大学をはじめとする海外の名門大学図書館で運用の実績があり、Times Higher Education「2018年世界の大学ランキング」上位20大学のうち、15大学がEx Libris社の図書館システムを導入している。2017年度末現在、日本でAlma+Primo VEを共同導入した機関はなく、2017年度時点では国内初の事例である。

Almaの特長としてまず挙げられるのは、「紙資料」と「電子資料」を1つのシステムで一元的に管理・提供するという設計思想である。これは、紙資料の管理を基本として設計されてきた従来の図書館システムとは異なる点である。また、利用者向けのインターフェースをディスカバリー・インターフェースに一本化し、紙資料のみのOPACを持たないこともAlmaの特徴であり、これもまた、紙と電子の一元的な提供を念頭に置いたものであると言える。さらに、クラウド型のシステムのため、現在のようなサーバ機の設置や管理が不要となることも特徴である。これによって、サーバメンテナンスの経費を削減することが可能となる。また、異なる機関の間でのデータのやり取りも可能な設計となっていることも特徴である。そのため、Almaは大学間コンソーシアムで豊富な稼働実績を持っており、アジアでは、香港の主要8大学からなるコンソーシアム「JULAC」が、2017年夏にAlmaとPrimoに移行した。

5 今後の展望

早稲田大学図書館と慶應義塾大学メディアセンターは2017年度中、上記の経緯でシステム選定のフェーズを終え、新たにシステム移行検討のフェーズに入った。Ex Libris社とともにデータの移行の準備を進めつつ、システム変更や早慶の協力拡大に伴って生じるサービスや業務フローの変更も、同時に検討している。

2017年5月の覚書締結時にその目的として掲げた「システム共同運用による運用の安定化とコスト削減」、「目録形式の標準化、目録作成のコスト削減」、「早慶間での知識・経験の共有、人的交流の促進」、そしてそれら3点を通じた「共同運用による利用者サービス・資料の充実」を

実現することが、今回のシステム共同化の最終的な目的である。2019年度中の稼働を目指し、2018年度はさらに歩みを進めていくことになる。

※1 早稲田大学に関しては、2017年度現在、専任教職員(助教、助手、名誉教授を含む)、大学院学生、学部学生は、学生証・教職員証・名誉教授証を提示するだけで、慶應義塾大学の図書館(三田メディアセンター、日吉メディアセンター、理工学メディアセンター、信濃町メディアセンター、湘南藤沢メディアセンター、薬学メディアセンター)を利用することができる。さらに、このうち専任教職員は、三田メディアセンターで図書利用券の発行を受けることによって、前述の慶應義塾大学の図書館の資料を貸出することができる。

※2 ILL(Interlibrary Loan)とは、異なる機関の図書館から図書を取り寄せて、所属図書館内で利用者に見覧させるサービスである。また、資料そのものではなく、資料の複写物を取り寄せて利用者に提供するサービスもILLに含まれ、前者が現物貸借、後者が文献複写と呼ばれる。早慶の図書館はお互いに物流の定期便を行き来させ、常時ILLのやり取りを行っているほか、お互いに学内者料金でILLに依拠している。